

ワールドカップ・ロシア大会の熱狂とラテンアメリカの悲喜こもこも

沢田 啓明

ラテンアメリカ(中南米)の男性のほとんどは、フットボールをこよなく愛する。子供や若者はもちろん、中高年になっても知人、友人とフットサルやフットボールのチームを作ってボールを蹴り、ひいきするプロクラブと代表チームを熱烈にサポートする。その一方で、女性の多くはフットボールにあまり関心がない。のみならず、夫や恋人がフットボールに夢中になっている間、ほったらかしにされて苦々しく思っている人が少なくない。彼女たちは、フットボールと一種の“競合関係”にあるのだ。

この“競合関係”が、一時的に解消されるときがある。4年に一度開催されるワールドカップ(W杯)の期間である。このときばかりは、老若男女誰もが自国代表を熱烈に応援する。ラテンアメリカの人々には欧州の元宗主国と戦って独立を勝ち取ったことへの強い誇りと愛国心があり、そのひとつの発露として、代表チームに体现される“祖国”に熱い声援を送るのである。

ブラジルでは、W杯でセレソン(ブラジル代表)の試合がある時間にはすべての商店が閉店し、あらゆる会社が営業を停止し、学校の授業が休講になる。全国民にセレソンの試合を見る権利が与えられており、誰もが嬉々としてその権利を行使する。セレソンがゴールをあげれば、そこかしこから歓声が上がり、爆竹が鳴り響く。快勝すれば、試合後は飲めや歌えの大騒ぎ。ただし、武運拙く負けてしまったら、皆、しょげ返り、お通夜のような静けさが町を包む。

とはいえ、ラテンアメリカのすべての国がブラジルのように常にW杯に参加できるわけではない。自国代表が地区予選で敗退すると、人々は失望し、憤慨する。W杯でハラハラワクワクしながら代表チームを応援する楽しみが奪われてしまうからだ。さりとて、いざW杯が始まるととても無関心ではいられず、代わりの別の国を応援する。欧州に出自がある人はその国の代表を応援することがあるし、他のラテンアメリカ諸国で自分が好感を抱く国だったり好きなチームを応援することも多い。この場合、華麗

なテクニックを駆使して攻撃的にプレーし、人種も雑多なセレソンが多くの人にとっての“第二代表”となる。ブラジルの宿敵アルゼンチンは人種的に欧州系が圧倒的に多く、文化、習慣も欧州的で「やや高慢」というイメージを持たれており、ブラジルほどの人気はない。

今年の6月中旬から7月中旬まで約1カ月間、ロシアでW杯が開催された。ラテンアメリカから参加したのは、南米のブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、コロンビア、ペルーと中米のメキシコ、コスタリカ、パナマの8カ国。中米諸国は北中米予選を戦うが、今回は7大会連続出場を続けていた米国が敗退。カナダも予選で敗れ、北中米代表の3枠はラテンアメリカの国で占められた。

ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、メキシコはW杯の常連で、コロンビアとコスタリカも2014年大会でベスト8入りした強豪だが、パナマは初出場、ペルーも36年ぶり(通算5度目)の檜舞台だった。その一方で、2015年と16年のコパ・アメリカ(南米選手権)を制覇したチリ、2010年大会の決勝トーナメント1回戦で延長、PK戦の末に日本を退けてベスト8入りしたパラグアイ、2014年大会に出場したエクアドルなどが予選で姿を消した。

パナマは人口500万人に満たない中米の小国だが、近年、ラテンアメリカ随一の経済成長を続けている。これまでフットボールの国際舞台ではほとんど実績がなかったが、予選を勝ち抜いて初めてW杯出場権を獲得。国中が喜びに沸いた。

W杯での記念すべき最初の試合となった1次リーグのベルギー戦の試合前、選手たちは感極まって泣きながら国歌を合唱。この試合を実況中継したテレビ局のアナウンサーと解説者も、号泣しながら抱き合った。この光景が世界中に流れ、「初出場に感激する初々しさ」と話題になった。

しかし、現実は厳しい。1次リーグ3試合で計11失点を喫して全敗。それでも、イングランドとチュニジアから1点ずつを奪って国民を喜ばせた。

ペルーは、大会前、エースストライカーで主将のパオロ・ゲレーロがW杯南米予選の試合後のドーピング検査で陽性となり、長期間の出場停止処分を下されてW杯出場が絶望的となっていた。しかし、開幕直前に急転直下、出場を許され、国中が沸き立った。1次リーグでデンマークとフランスに惜敗したが、オーストラリアにゲレーロらの得点で快勝。1978年大会以来40年ぶりの勝利を国民に届けた。



Copa 2018 でのブラジルサポーターの熱烈な応援ぶりを伝える“Folha de S.Paulo”紙（2018年6月28日付）

過去、世界最多の5大会で優勝している“フットボール王国”ブラジルは、自国開催の2014年大会で国民から優勝を強く期待されながら準決勝ドイツ戦で1-7という記録的大敗を喫して4位に終わった。その後、名門コリンチャンス率いてクラブ世界王者となった実績を持つチッチが監督に就任し、攻守に組織的なプレーを叩き込んで南米予選を首位で突

破。その後の欧州遠征でも好調で、ドイツと並んで優勝候補の筆頭に挙げられていた。

1次リーグを2勝1分けの首位で突破し、決勝トーナメント1回戦のメキシコ戦ではエース ネイマールの活躍で快勝。しかし、準々決勝ベルギー戦で前半に2失点。後半、猛反撃して1点返したが、再三の決定機にシュートを失敗し、相手GKの好守もあって追いつけなかった。

ブラジルは2014年にW杯を、16年に南米初の夏季オリンピックとパラリンピックを開催したが、その後も景気は上向かない。今年5月末には燃料の高騰からトラック運転手らが大規模なストライキを行ない、物流が大混乱。国民はセレソンがW杯で16年ぶり6度目の制覇を達成して4年前の屈辱を晴らすことを切望していたが、今回も優勝に手が届かなかった。10月には大統領選挙が行なわれるが、混戦が予想されている。

1978年と86年のW杯を制覇した強豪アルゼンチンも、国民の期待を裏切った。1次リーグを苦しみながらも2位で通過したが、決勝トーナメント1回戦でフランス（この大会で優勝）と対戦し、激しい点の取り合いの末に敗れた。大黒柱のメッシが厳しいマークを受けて本来のプレーができず、エースの不調をカバーする組織的なプレーが物足りなかった。経済的にも苦しい状況が続いており、国民はフットボールにも裏切られた格好だ。

ウルグアイはブラジルとアルゼンチンに挟まれた人口350万人足らずの小国だが、フットボールの伝統国で、1930年と50年のW杯で優勝している。カバーニとスアレスという世界有数のストライカーを擁し、1次リーグを3戦全勝で突破。決勝トーナメント1回戦で欧州王者ポルトガルと対戦し、カバーニの2得点で快勝した。しかし、当のカバーニが試合終盤に負傷し、準々決勝のフランス戦を欠場。0-2で敗れて大会から姿を消した。

コロンビアも、近年、強豪の仲間入りをしている。2014年大会では1次リーグで日本に圧勝するなど3戦全勝でグループを突破し、決勝トーナメント1回戦でもウルグアイを倒したが、準々決勝で開催国ブラジルに惜敗した。今大会にかかる国民の期待は大きく、往年の名選手でアフロヘアがトレードマークのカルロス・バルデラマが「もしコロンビアが優勝したら頭を剃る」と宣言して話題になった。

前回大会に続いて今大会でも1次リーグで日本と

同組となり、初戦で対戦。しかし、試合開始早々、日本の大迫勇也のシュートをコロンビア選手がペナルティエリア内で手で止めてPKを取られ、しかもこの選手は退場処分。日本は香川真司がPKを決めて先制する。その後、コロンビアが追いついたが、後半、日本は大迫がCKを頭で決め、2-1で勝った。これはコロンビア国民にとって全く予想外の結果だったが、それでもその後の2試合に勝って一次リーグを首位で突破。決勝トーナメント1回戦でフットボールの母国イングランドと対戦し、延長を終えて1-1の同点だったが、PK戦の末に惜敗した。2014年大会得点王ハメス・ロドリゲスが故障のため万全の体調でなかったのが響いた。

メキシコは、1970年と86年にW杯を開催していずれもベスト8入りしている中米きっての強豪。小柄な選手たちが丁寧にショートパスをつなぐ。1次リーグ初戦で前回大会の覇者ドイツと対戦し、堅守速攻で1-0で勝って世界に衝撃を与えた。韓国にも勝ったが、スウェーデンには敗れて2勝1敗。もしドイツが韓国を倒せば得失点差で3位となって敗退するところだったが、韓国がドイツを倒してくれたおかげで2位に滑り込み、1次リーグを突破した。

メキシコシティの在メキシコ韓国大使館の前には数千人の市民が集まり、韓国の“援護射撃”に感謝。この日以降、メキシコ人にとって韓国のイメージは劇的に好転したようだ。

メキシコでは7月1日に大統領選挙が行なわれ、左派のロペス・オブラドール候補が勝利。その翌日、決勝トーナメント1回戦でブラジルと対戦したが、ネイマールらの個人技を抑え切れず、敗退した。

コスタリカはラテンアメリカでは珍しく政治、経済が安定している。2014年大会の1次リーグで強豪ウルグアイとイタリアを倒してグループを首位で突破し、決勝トーナメント1回戦でもギリシャを下してベスト8入りして旋風を巻き起こした。この大会でも守備の強さは健在だったが、セルビアとブラジルに敗れて一次リーグで敗退した。

2014年のブラジル大会で、ラテンアメリカ諸国はベスト4にアルゼンチン(準優勝)とブラジルが残り、ベスト8にコロンビア、コスタリカを加えた4カ国、ベスト16にチリ、メキシコ、ウルグアイを加えた7カ国が食い込んだ。ラテンアメリカの選手にとっては気候、風土の点で馴染みやすく、大挙してやってきたサポーターからの声援も背中を押した。

しかし、ロシア大会ではベスト4は欧州勢に独占され、ベスト8にウルグアイとブラジルの2カ国、ベスト16にコロンビア、メキシコ、アルゼンチンを加えた5カ国が残っただけ。ブラジルのネイマール、アルゼンチンのメッシ、コロンビアのハメス・ロドリゲスら各国のエースが軒並み不調だった。欧州での開催だったため前回大会のような気候面などのアドバンテージがなく、応援に駆け付けたサポーターの数も少なかった。

ともあれ、4年に一度のフットボールの祭典が終わり、ラテンアメリカの人々も日常に戻った。多くの国では政治と経済が不安定な状態が続くが、人々はフットボールを愛し、家族や親しい友人との時間を大切にしながら、精一杯、生きている。

(さわだ ひろあき フリーランスのフットボール・ジャーナリスト、サンパウロ在住)